

いま私が言いたいことは白鳥が遠路はるばる飛来してくる行動はグラフにして表わすこともできる。或いは眼球の動きを正確に記録するには絵を描く事とは全く関係ない別の眼球を使用しなければ画家は絵を描くことが出来ない。絵は空間表現だとすれば眼球の動きを記録した一枚の図は喜怒哀楽の空間記録となる。ここで私が言いたいのは絵は空間記録の上に成り立っている。絵の秘密、或いは鍵と呼ばれる殆どのものが生態的空間的記録なくしては見えないのではなかろうか。だとすれば絵を描く画家、何かに愚かれて指先

を震わせるが何も描くことが出来ない、もたもたしている人間。作品の出来ない画家が存在するとすれば生態的空間記録によってしか表現できないと思われるが、その一方で別に時間を取り込んだ記録映画がある。勿論、記録映画で結構だが、絵は一瞬にして見えなければならぬ。確か、本にも出来るのだが100ページといえども一瞬にして見え、長い時間をかけて丁寧に読んだ以上に核心を掴みとらねばならない。絵は一瞬に理解されるものであるという。また一瞥して知ることのできる空間表現でなければならぬと言う一面は確かに持っている。だから一瞬に見終り一瞬に理解される記録映画でなければならぬが、そんな記録映画は有もしないが作れもしない。絵は理解される、されないに関わらず絵は一瞬にして目に飛び込んでくるということになるのだが。

そうして興奮して描けず、ただ指を震わすだけの画家は画家と呼べるのだろうか。そのことは人間であれば誰しも体の中に渡りの習性としての画家が棲息しているのだろうか。そのことの意味は難しいので今のところ此の儘にしておく。画家はどうあれ一枚の絵に還元することのみに熱狂する症状であると同時に職業と言われている。それ故、画家は一枚の絵と対決しなければならぬが、真の意味では絵以外に対決する必要はない。この素朴な仕組がすべてを遮蔽して絵を描く画家本人にも絵を観る鑑賞者にもコレクターにも、人間の感動が無機物の絵の具とどう連携しているのか注意、或いは興味を抹殺して、画家と絵に分け、画家から即ち本体から絵を観察する通路を遮断してしまっている。絵の生まれる渦巻きの現場にしかないもの、それは人間が何故絵を描くのかの秘密であり、人間、全てが持つ習性なのかを発見できる、ただ一つの発信源なのである。絵は熱狂し混乱し乱闘の最中に画家の脳髓に芽生え絵は結果として誕生するのではないかとされているが、いまだに真相は不明であるようだ。

ここで私が言いたいことは絵と画家が切り離された結果、絵のみが商品化され断片化され文字化されて主体の本人である画家は全く見えない存在となっしまい、あれほど無頼で乱暴な画家は何処にいるのか姿も見せず。ものも言わず。絵だけが美術館、画商と驚くほどの立派な衣装と恭しい口上書がついて流通している。勿論、悪かろうはずはない。部分化することによって画家以外の人々が絵を文字化して全く画家とは別の物語を作ることが出来る。それは良いことであり面白いことに間違いない。確かにそんな道があってもよいが、左右の脳の切り離し大脳新皮質等人間だけがもつと言われる文化といわれるソフト

は混乱の極、或いはビック・バーンと呼ばれる嵐から生身の人間を、本能を守ることが出来るのか。原因不明ながらインパクトが最も強いときは酒をあおって画家同士が大激論している時だと言われている。この膨大なエネルギーを、いま世界の美術界はこのエネルギーを消滅させることにほぼ成功したのではないかと私は思わないわけにいかない。